



室蘭工業大学

学術資源アーカイブ

Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive



モンゴル語の受動構文と使役構文の<受身>の意味

メタデータ	言語: jpn 出版者: 北海道言語研究会 公開日: 2020-08-03 キーワード (Ja): 受動構文, 使役構文, 受身, 格形, 意味役割, 動詞意味タイプ, 有生性, 特定性 キーワード (En): 作成者: 橋本, 邦彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/00010260

モンゴル語の受動構文と使役構文の<受身>の意味*

橋本 邦彦

The Meanings of <Passive> Shared by the Passive Voice and the Causative Voice in Mongolian

Kunihiko HASHIMOTO

Abstract : The purpose of this article is to elucidate the meanings of passive shared by the passive voice and the causative voice in the Mongolian language. Fundamentally, the passive and the causative construct different sentences both morpho-syntactically and semantico-functionally. The passive sentences focus the patient, while the causative sentences highlight the relationship between the causer and the agent. However, some passive and causative sentences share the passive meanings with each other. By considering the morphological-syntactic and semantic-functional characteristics of the passive and the causative separately, we will find out what factors work to generate the common meaning of <passive> and what differences the two voices have in them.

キーワード : 受動構文 使役構文 受身 格形 意味役割 動詞意味タイプ 有生性 特定性

1. 序論

本稿の主な目的は、受動構文と使役構文でそれぞれ表される<受身>の特徴と、両構文相互の関係を解明する点にある^[1]。小澤 (2005: 175-176)は「二種類の受動表現」を担う構文として、(1-1a)の受動構文と(1-1b)の使役構文を挙げている^[2]。

(1-1) a. **Minij aav tüünd al-a-gd-san.**^[3]

1SG:GEN father:NOM 3SG:DAT kill-EP-PAS-PF

(私の父は彼に殺された。)

b. **Minij aav tüünd al-uul-san.**

1SG:GEN father:NOM 3SG:DAT kill-CAUS-PF

(私の父は彼に殺された。Lit. 私の父は彼に殺させた。)

(1-1a, b)は共に被態主(Patient)の主格形主語と行為主(Agent)の与格形補語を持つ。唯一の違いは、他動詞語幹 al-「～を殺す」に、(1-1a)では受動形接尾辞-gd-が、(1-1b)では使役形接尾

辞-uul-が付加している点だけである。

小澤(2005)は、「この二者が、どのような状況下で、どのように使われているのか、まだ完全に研究されていない。」と述べた上で、「秘史モンゴル語には頻繁に見られ、中世モンゴル語では決して珍しいものではない。」と史的な側面から両構文が〈受身〉の意味を共有してきた事実を指摘するのである。

では、形態 - 統語的に異なる受動構文と使役構文の間になぜ同じ意味の共有性が存在するのだろうか。東京外国語大学『モンゴル語文法モジュール；標準コース；Lesson 19；Step 2 ヴォイス(2) 受動(以降、東外大モジュールと略記)』(2019.3.29.閲覧)によると、使役形が受動形に意味の面で「流用」される条件として、次の2つが記されている。

(1-2) 使役形の受動形への「流用」条件

- a. 動詞が具体的な行為や動作を表す。
- b. 受動構文の主語にその行為や動作の影響が及ぶ^[4]。

(1-2a)は動詞の意味タイプが行為(Action)であることを、(1-2b)は主語に受影性(Affectedness)が及ぶことを示す。この2つの条件を満たす場合に限り、使役形から受動形への「流用」が生じるとし、次の例文を提示する^[5]。

(1-3) a. **Tömör zev-e-n-d /*zev-eer id-үүл-sen.**^[6]

iron:NOM rust-EP-n-DAT rust-INS eat-CAUS-PF

(鉄が赤さびに食われた。)

b. **Ojuutan bagš-i-d /*bagš-aar zagn-uul-san.**^[7]

student:NOM teacher-EP-DAT teacher-INS scold-CAUS-PF

(学生が先生に叱られた。)

(1-3a, b)は、主格形主語と与格形補語、他動詞語幹に使役形接尾辞の付いた使役構文であるが、〈受身〉を表している。補語の格形を具格形に替えると、不適格になる。

補語の格形の選択については、Janhunen(2012: 250)も「使役形が受動形の機能で用いられる」場合、「使役形述語は常に与格形補語と結び付き、具格形補語は含まない。」と説明する。Janhunen(2012)はさらに、「口語で真正の受動構文が稀なので、使役構文が受身の意味を持つ構文に代わり易い。」と指摘した上で、受動構文と使役構文の自然な結びつきは「与格形の相似用法(analogous use)により生み出される」と主張する。すなわち、〈受身〉の共有を、与格形補語が両構文において行為主として標示される事実に着目させるのである^[8]。

使役構文の、〈受身〉の意味の特有性に着目して、〈受身〉型使役構文が被害／迷惑を表すことがいくつかの研究で言及されてきた。たとえば、山越(2012: 258-259)は「行為の影響が自分自身の所有物に及ぶ場合」使役構文は被害／迷惑の意味を示す」として、次の例文を挙げている。

(1-4) a. **Bi xoni-oo čono-n-d id-üül-sen.**^[9]

1SG:NOM sheep-REF wolf-n-DAT eat-CAUS-PF

(私は自分の羊を狼に食べられた。)

b. **Bat noxoj-d-oo xöl-öö xaz-uul-san.**^[9]

[name]:NOM dog-DAT-REF leg-REF bite-CAUS-PF

(バトは自分の犬に自分の足を咬まれた。)

(1-4a, b)は行為主に与格形補語を、動詞語幹に使役形接尾辞-uul/-üül-を付加したく受身>型使役構文である。注目したいのは、受動構文が自動詞構文であるのに対して、上記の構文が直接目的語を有する他動詞構文であるということである。この直接目的語は再帰所有形であり、(1-4a)では「家畜など身近な所有物」、(1-4b)では「自分自身の体の一部」を指す(他に Washio (1995)、西村(1998)、アリオナ(2008)、梅谷(2008)を参照のこと)。

以上に紹介した先行研究に対しては、少なくとも5つの反例が見出される。第1の反例として、東外大モジュールの「流用」条件(1-2a)の動詞の行為性と(1-2b)で記された主語への受影性の両条件を満たしているのは、<受身>の意味に限定されるものではない。<受益>型使役構文においても、同様の事例が観察される。

(1-5) a. **Övčtön bariač-i-d bari-uul-a-v.**

patient:NOM chiropractor-EP-DAT touch-CAUS-EP-PST

(患者は整体師に指圧してもらった。) <K & Ts: 128>

b. **Ta ax-d-aa bič-üül.**

2SG:NOM elder brother-DAT-REF write-CAUS:IMP₂

(あなたは自分のお兄さんに書いてもらいなさい。) <AD>

(1-5a, b)は(1-3a, b)と同じように、主格形主語と与格形補語を備えた<受益>型使役構文である。橋本(2019: 170, 172)は、この構文の行為連鎖(action chain)では、主格形主語は潜在的な使役主(Causer)であると同時に受益主(Beneficiary)であり、行為主の与格形補語が直接行う行為の影響の結果を、恩恵や利益という形で被ることを明らかにしている。

第2の反例として、東外大モジュールも Janhunen(2012)も、<受身>型使役構文では行為主として与格形補語のみが現れ、具格形補語は用いられないと主張しているが、実際には、具格形補語の出現する文が存在する。

(1-6) a. **Muur noxoj-g-oor xaz-uul-a-v.**

cat:NOM dog-EP-INS bite-CAUS-EP-PST

(ネコがイヌに咬みつかれた。) <K & Ts: 123>

b. **Mongol-ijn ard tümen xuv'sgal**

Mongol-GEN people revolution:NOM

MAXN-aar

udird-uul-san.

Mongolian People's Revolutionary Party -INS lead-CAUS-PF

(モンゴル人民革命はモンゴル人民革命党によって導かれた。) <AD>

(1-6a, b)は<受身>型使役構文であるが、補語は具格形である。

第3の反例として、Washio(1995)、アリオナ(2008)、梅谷(2008)、山越(2012)は、他動詞構文で「家畜などの身近な所有物」、もしくは「自分自身の体の一部」を直接目的語とする使役構文は「被害／迷惑の受身(adversative passive)」を表すと主張するが、同じ形の使役構文でありながらこの意味を表さない文も存在する。

(1-7) a. **Bi setgüül-d ögüülel šülg-ee nijtl-üül-ž baj-san.**

1SG:NOM magazine-DAT article poem-REF publish-CAUS-ICC be-PF

(私は雑誌に自分の記事と詩を掲載してもらった。) <AD>

b. **Bi xaniad xür-eed, tolgoj övd-ööd, xaluur-aad baj-san**

1SG:NOM get a cold-PCC head:NOM hurt-PCC have a fever-PCC be-PF

učir xičeel-ijn daraa emneleg-t oč-i-ž emč-i-d

because lesson-GEN after hospital-LOC go-EP-ICC doctor-EP-DAT

bij-ee üz-üül-lee.

body-REF see-CAUS-RPST

(私は風邪を引いて、頭が痛くて、熱があったので、放課後、病院に行って、医者
に自分の体を診てもらった。) <AD>

(1-7a, b)には行為主の与格形補語と被態主の再帰所有形直接目的語が含まれている。(1-7a)の「記事と詩」は主語自身が創り出したという点で「身近な所有物」である。(1-7b)の「自分の体」は文字通り「自分自身の体の一部」に他ならない。ところが両文とも<受益>を表しているのであって、「被害／迷惑の受身」の意味はない。

第4の反例として、被害／迷惑の意味は使役構文だけが担っているわけではなく、本来の受動構文でも同様の意味を表す場合がある。

(1-8) a. **Ter xojor xulajč-i-d balb-a-gd-žee.**

3SG:NOM two robber-EP-DAT beat-EP-PAS-PPST

(彼は2人の強盗になぐられた。) <AD>

b. **Ojrdoo bi ažil-d-aa dar-a-gd-aad daanč zavgüj**

these days 1SG:NOM work-DAT-REF press-EP-PAS-PCC very busy

baj-na.^[10]

be-PRS

(最近、私は自分の仕事に追われて、とても忙しい。) <塩谷・プレブジャブ 2006:163>

(1-8a)は主語「彼」が補語「強盗」に「なぐる」という負の行為を被ったとの読みを持つ。(1-8b)は主語「私」が補語「仕事」の引き起こす「追う」という事態の結果に影響されたことを示す。どちらの文も被害／迷惑を表している。

第5の反例として、「口語で真正の受動構文の使用が稀れ」(Janhunen 2012: 250)と語られているが、手元のデータに限ってもそれなりの数(105例ほど)の受動構文を認めることができる。「口語」が話し言葉だけを指すのか、「文語」と対比させて「現代語：現代、色々な場面で使用されている言葉」を含めるのかは定かではないが、どちらの場合でも受動構文は普通に使用されているように思われる。

(1-9) a. **Ulaanbaatar-Söül-ijn čiglel-ijn OM-8027 rejs-ijn oncoc-oor**

Ulan Bator Soul-GEN direction-GEN [plane name] trip-GEN plane-INS
zorčigč Dogsomijn Arjuunbat xuoramč passport-aar xil nevtr-e-x
traveler [name]:NOM fake passport-INS border:∅ cross-EP-NPS
gež baj-g-aad Bujant-Uxaa dax' xil-ijn šalg-a-n
QUT be-EP-PCC [airport name] in border-GEN check-EP-ASS
nevtr-üül-e-x boomt-ijn ažitlan-d öčigdör
cross CAUS-EP-NPS frontier cross-point-GEN personnel-DAT yesterday
bari-gd-žee.

arrest-PAS-PPST

(ウランバートル - ソウル行の OM-8027 旅客機で乗客のドクソミン・アリョーンバトは、偽のパスポートで国境を越えようとして、ボヤン - オハー空港の査証税務機関の職員に、昨日、逮捕された。) <AE: 1997.11.10.>

b. **Činij nüür nar-a-n-d tül-e-gd-čix-lee.**

2SG:GEN face-NOM sun-EP-n-DAT burn-EP-PAS-COMPL-RPST

(君の顔は陽に焼かれてしまった。) <S&B: 274>

(1-9a)は日刊紙の記事からの抜粋で、書き言葉である。他方、(1-9b)は会話からの引用で話し言葉である。2つの文とも受動形接尾辞-gd-を含む「真正の」受動構文である。

以上、主な先行研究に関して5つの反例を提示した。ここで再考したいのは、<受身>型使役構文と「真正の」受動構文との間の類似点ばかりに目が行き過ぎて、相違点への目配りを看過していないかという問題である。確かに、両構文とも主格形主語と与格形補語を備え、<受身>という共通の意味を共有しているように見える。従来のアプローチのように、共通点から出発するのではなく、2つの構文はそもそも別物であるという事実から出発して考察する中で、<受身>という共通項の生じた要因を究明する方が理に適っているように思われる。そこで本稿では、次の3点をめぐって論を展開していく。

(1-10) a. 受動構文と<受身>型使役構文の、各々の形態 - 統語的および意味 - 機能的特徴を

特定して明記する。

- b. 両構文の特徴を踏まえて、〈受身〉の意味が出現する要因を解明する。
- c. 両構文の〈受身〉の相互補完性(complementarity)を証明する。

第2節では、受動構文の形態 - 統語的および意味 - 機能的特徴を考察する。第3節では、〈受身〉型使役構文を中心にして、橋本(2019)で扱った〈使役〉型ならびに〈受益〉型使役構文と比較しながら、その形態 - 統語的および意味 - 機能的特徴を探求する。第4節では、両構文間に〈受身〉を介して相互補完的關係(complementary relationship)が成立することを証明する。

2. 受動構文

2.1. プロトタイプの受動構文

次の4つの受動構文を観察しよう。

- (2-1) a. **Ter xojor xulgajč-i-d balb-a-gd-žee.**
 3SG:NOM two robber-EP-DAT beat-EP-PAS-PPST
 (彼は二人の強盗になぐられた。) <AD>
- b. **Nogoon mod boroon-ij us-a-n--d uгаа-gd-žee.**
 grass tree:NOM rain-GEN water-EP-n--DAT wash-PAS-PPST
 (草木が雨水に洗われた。) <AD>
- c. **Ta nadad ix taal-a-gd-a-ž baj-na.**
 2SG:NOM 1SG:DAT much like-EP-PAS-EP-ICC be-PRS
 (あなたは私に大変気に入られている。) <K & Ts:125>
- d. **Jör n' ter üje-ijn dür zurag nadad maš tod**
 in general that period-GEN scene:NOM 1SG:DAT very clearly
san-a-gd-dag.
 remember-EP-PAS-HBT
 (一般に、その時期の光景が私にはとてもはっきりと思い出される。)
 <ÖS: 2001.3.6.>

(2-1a, b, c, d)から、受動構文の6つの形態 - 統語的および意味 - 機能的特徴を挙げることができる。

第1の特徴は、受動形動詞は、原則として、他動詞語幹に接尾辞 *gd-*を付加して形成される^[11]。(2-1a)では *balb-*「～をなぐる」、(2-1b)では *ugaa-*「～を洗う」、(2-1c)では *taal-*「～を気に入る」、(2-1d)では *san-*「～を思い出す」に、受動形接尾辞が後続しているが、すべて他動詞語幹である。

第2の特徴は、第1の特徴の論理的帰結として、受動構文に対応する他動詞構文が存在す

ることである。言い換えると、受動構文は他動詞構文が自動詞化した構文ということになる。

(2-2) a. **Xojor xulgajč tüünijg balb-a-žee.**

two robber:NOM 3SG-ACC beat-PPST

(二人の強盗が彼をなぐった。)

b. **Boroon-ij us nogoon mod uгаа-žee.**

rain-GEN water:NOM grass tree:∅ wash-PPST

(雨水が草木を洗った。)

c. **Bi taniyg ix taal-ž baj-na.**

1SG:NOM 2SG:ACC very like-ICC be-PRS

(私はあなたを大変気に入っている。)

d. **Jör n' bi ter üje-ijn dūr zurg-ijg maš tod**

in general 1SG:NOM that period-GEN scene-ACC very clearly

san-a-dag.

remember-EP-HBT

(一般に、私はその時期の光景をとてははっきりと覚えている。)

(2-2a, b, c, d)はこの順で(2-1a, b, c, d)と対応する。(2-2)の他動詞構文を(2-1)の受動構文の基底文と捉えれば、次のような交差する対応関係が成立する。

(2-3) 他動詞構文と受動構文の対応関係

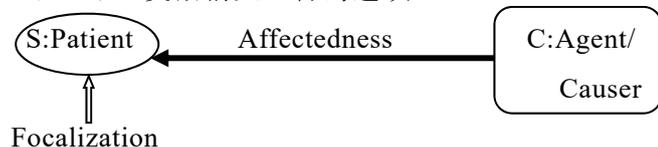
他動詞構文 [主語：主格形] + [直接目的語：対格／ゼロ格形] + [動詞：他動詞]

受動構文 [主語：主格形] + [補語：与格形] + [受動形動詞：自動詞]

他動詞構文の対格形/ゼロ格形直接目的語は受動構文の主格形主語に、主格形主語は与格形補語に交差する形で交替する^[12]。それに伴って動詞は他動詞から自動詞へ移行する。

第3の特徴は、主語が焦点化(focalization)と受影性(affectedness)を受けることである。Shibatani(1985: 841)によると、主語の位置は「最も焦点の当たる位置」であり、動詞の示す行為や事態の影響を被る被態主(Patient)として受影性を「際立たせる」効果を与える。一方、補語は行為主(Agent)や原動主(Causer)として当該の行為や事態を引き起こす。これを行為連鎖(action chain)で図示すると、次のようになる。

(2-4) プロトタイプ受動構文の行為連鎖



第4の特徴は、与格形の補語が動詞の表す行為や事態を引き起こす行為性(Agentivity)や原動性(Causativity)を担うということである。(2-1a)の補語「強盗」は行為主として動詞の示す行為を遂行する。(2-1b)の「雨水」は一定の物理運動により自らエネルギーを発動する原動主(Causer)として事態を引き起こす。(2-1c, d)の1人称代名詞補語は、「気に入る」、「思い出す」という認識活動を発揮する経験主的な発動主(Experiencer/Causer)と考えられる。

第5の特徴は、主語と補語は有生性(animacy)と特定性(specificity)に関与しないということである。(2-1a, c)では主語、補語とも有生で特定の[+animate, +specific]である。(2-1b)では、反対に、主語、補語とも無生で非特定の[-animate, -specific]である。(2-1d)では、主語が無生で特定の[-animate, +specific]なのに対し、補語は有生で特定の[+animate, +specific]である。

第6の特徴は、語幹動詞の意味タイプが、行為(Action)か活動(Activity)であるということである。橋本(2019: 147-148)は、モンゴル語の動詞を次の4つのタイプに分類する。

(2-5) モンゴル語の動詞の意味タイプ

- A. 行為動詞(Action Verbs): 意図的／意志的な、あるいは言語を伴う、動作や行為を表す動詞。
- B. 活動動詞(Activity Verbs): 知覚、認識、感情、生理現象などの、身体的、心理的、あるいは知性的に働く活動を表す動詞。
- C. 自発動詞(Spontaneity Verbs): 非意図的／非意志的で、自然発生的に、あるいは内在的な働きにより生じる事態を表す動詞。
- D. 状態動詞(State Verbs): 可変的な状態、継続的な状態、あるいは恒常的な状態を表す動詞。

この分類に従うと、(2-1a, b)の語幹動詞は(2-5A)の行為動詞に、(2-1c, d)は(2-5B)の活動動詞に属する。では、(2-5C)の自発動詞、(2-5D)の状態動詞を語幹とする受動構文は存在するのだろうか。

- (2-6) a. ***Övs** **Dorž-i-d** **xat-a-gd-san.**
 grass:NOM [name]-EP-DAT dry-EP-PAS-PF
 (草はドルジによって乾けられた。)
- b. ***Ene muzej** **Dulmaa-d** **baj-gd-san.**
 this museum:NOM [name]-DAT be-PAS-PF
 (この博物館はドルマーによってあられた。)

(2-6a)は自発動詞を、(2-6b)は状態動詞を語幹にした受動構文であるが、すべて不適格と判定される。それは、次の文に見るように、受動化する動詞が他動詞ではなく自動詞なので、第2で挙げた特徴と齟齬を起こすからである。

(2-7) a. **Övs** **xat-san.**

grass:NOM dry-PF

(草が乾いた。)

b. **Ene muzej** **xot-ijn** **töv-d** **baj-san.**

this museum:NOM town-GEN center-LOC be-PF

(この博物館は町の中心部にあった。)

ただし、これらの語幹動詞に使役形接尾辞を付加すると他動詞化するので、適格な受動構文が得られる^[13]。

(2-8) a. **Övs** **Dorž-i-d** **xat-aa-gd-san.**

grass:NOM [name]-EP-DAT dry-CAUS-PAS-PF

(草はドルジによって乾かされた。)

b. **Ene muzej** **Dulmaa-d** **baj-g-uul-a-gd-san.**

this museum:NOM [name]-DAT be-EP-CAUS-EP-PAS-PF

(この博物館はドルマーによって建てられた。)

(2-8a, b)に見るように、使役化することで自動詞語幹は他動詞語幹に変わるが、それに伴い、意味のタイプも自発や状態から行為へと交替するのである。

以上の考察から、プロトタイプ受動構文の特徴をまとめると、次のようになる。

(2-9) プロトタイプ受動構文の特徴

A. 形態 - 統語的特徴

a. 主語：主格形

b. 補語：与格形

c. 語幹動詞：他動詞

d. 構文：自動詞構文；対応する他動詞構文がある。

B. 意味 - 機能的特徴

e. 主語：焦点要素；被態主(Patient)；[+/-animate]；[+/-specific]。

f. 補語：行為主(Agent)/原動主(Causer)；[+/-animate]^[14]；[+/-specific]。

g. 語幹動詞の意味タイプ：行為(Action)/活動(Activity)

(2-9)の 7 つの特徴を余すところなく有するときに、プロトタイプの受動構文が成立する。

2.2. 非プロトタイプの受動構文

2.2.1. 具格形の補語

受動構文の補語が与格形ではなく具格形で実現する事例が存在する。

(2-10) a. **Bidnij urgašl-a-x zam bol nam-aar**
 1PL:GEN proceed-EP-NPS road:NOM TOP political party-INS
zaa-gd-a-x jostoj.
 teach-PAS-EP-NPS should
 (私たちの進む道は党によって指導されるべきである。)
 <Kuz'menkov 1986: 52>^[15]

b. **Ene deel Xandsüren-g-eer ojo-gd-o-no.**
 this gown:NOM [name]-EP-INS saw-PAS-EP-PRS
 (この上着はハンドスレンによって縫われる。) <Kuz'menkov 1986: 52>^[15]

(2-10a, b)の主格形主語は[-animate]、具格形補語は、(2-10a)の「党」を人の集団から構成された組織と捉えるならば、共に[+animate]である。語幹動詞は、zaa-「～を教える」、ojo-「～を縫う」で、行為タイプの他動詞である。

(2-10a, b)に対応する他動詞構文は、次に示すようにすべて適格である。

(2-11) a. **Nam bidnij urgašl-a-x zam-ijg zaa-x jostoj.**
 political party:NOM 1PL:GEN proceed-EP-NPS road-ACC teach-NPS should
 (党は私たちの進む道を指導すべきである。)

b. **Xandsüren ene deel-ijg ojo-no.**
 [name]:NOM this gown-ACC saw-PRS
 (ハンドスレンがこの上着を縫う。)

(2-11a, b)の主格形主語と対格形直接目的語が、(2-10a, b)の主格形主語と具格形補語に、それぞれ、交差的に交替している。

以上から、受動構文の補語が具格形を取り得るのは、次の意味特徴を持つ場合に限るようである。

(2-12) 具格形補語を取る条件^[16]

- a. 主語：[-animate, +specific]の被態主
- b. 補語：[+animate, +specific]の行為主
- c. 語幹動詞：行為タイプの他動詞

(2-12)には、一見、反例と思われる文が見つかる。

(2-13) a. **Bi ene asuudl-aar olon udaa bajcaa-gd-san.**
 1SG:NOM this problem-INS many times investigate-PAS-PF
 (私はこの問題で何度も調べられた。) <K & Ts: 130>

- b. **Ene žil-ijn Pentatonik öör majag-aar jav-a-gd-a-na.**
this year-GEN [concert name]:NOM another pattern-INS proceed-EP-PAS-EP-PRS
(今年のペントニックは別のパターンで行われる。) <ÖS: 1999.12.10.>

(2-13a)の主語は[+animate]、補語は[-animate]である。(2-13b)の補語は[-animate, -specific]である。両者とも、(2-12a, b)に挙げた意味特徴に合致しない。また、(2-13b)の語幹動詞 *jav*-「行く、進行する」は自動詞であり、(2-12c)に適合しない。(2-13a, b)の具格形補語は、原因／理由もしくは様態を表し、行為主や原動主の意味役割を担っていない。また、*jav*-の受動形 *jav-a-gd*-は「(事が) 起こる、行われる、開催される (to take place)」の意味の自動詞で、語彙化していると考えられる。したがって、対応する基底文はすべて不適格になる。

- (2-14) a. ***Ene asuudal namajg olon udaa bajcaa-san.**
this problem:NOM 1SG:ACC many times investigate-PF
(この問題が何度も私を調べた。)

- b. ***Öör majag ene žil-ijn Pentatonik-ijg jav-na.**
another pattern:NOM this year-GEN -ACC proceed-PRS
(別のパターンが今年のペントニックを進める。)

受動構文の補語が具格形として実現するためには、主語は無生の被態主であると同時に、補語は有性の行為主である必要がある。しかも、どちらも特定の対象を指示するものでなければならない。受動構文の補語が無生である場合、たとえ具格形で現れたとしても、それは見かけ上の補語でしかなく、実態は、具格形が固有に備えている原因／理由もしくは様態の意味を示す付加語(adjunct)として機能しているのである。

2.2.2. 補語の非顕在性

補語の現れない受動構文は、数の上で、プロトタイプのものよりも多いように思われる。

- (2-15) a. **Delxijn 2-r dajñ-d olon xün al-a-gd-a-v.**
the World War II-LOC many person:NOM kill-EP-PAS-EP-PST
(第二次世界大戦では、大勢の人が殺された。) <K & Ts: 129>
- b. **Ter zaluu šorong-ooš sull-a-gd-san.**
that young person:NOM prison-ABL release-EP-PAS-PF
(その若者は刑務所から釈放された。) <K & Ts: 130>

(2-15a)には顕在的な与格形補語がない。行為主は戦争という状況では特定し難い。同様に、(2-15b)の行為主は「釈放する」権限を有する人物ないし組織であるが、この文脈ではあえて明示する必要はない。

(2-15a, b)は主語に起こった事態にのみ焦点の当たる事態文(event sentences)である。『東外大モジュール Lesson19:3』では、この形の受動構文は「行為主(agent)の潜在性(implicitness)」を示しており、「動作の主体は現実には存在するものの、ことばとしては言い表さない」と解説する。(2-15a, b)の潜在的行為主(implicit agent)は、当該の行為を遂行し得る[+animate]の特徴を持つと考えられる。対応する他動詞構文は、次のような形をとるだろう。

- (2-16) a. **Delxijn 2-r dajn-d xen negen n' olon xün al-a-v.**
 the World War II-LOC somebody:NOM 3PCL many person:Ø kill-EP-PST
 (第二次世界大戦では、誰かが大勢の人を殺した。)
- b. **Xen negen n' ter zaluu-g-ijg sull-a-san.**
 somebody:NOM 3PCL that young person-ACC release-EP-PF
 (誰かがその若者を釈放した。)

(2-16a, b)から、(2-15a, b)の受動構文では不特定あるいは特定の被態主が主語の位置を占める一方で、不特定の行為主が潜在化していることがわかる。

受動構文の主語が無生[-animate]の例も観察できる。

- (2-17) a. **Tajz-nij xöšig alguur nee-gd-e-ž baj-laa.**
 stage-GEN curtain:NOM gradually open-PAS-EP-ICC be-RPST
 (舞台の幕が少しずつ開けられていた。) <AD>
- b. **XX zuun bol Mongol-ijn tüüx-e-n-d**
 twenty century:NOM TOP Mongolia-GEN history-EP-n-LOC
bič-gd-e-x jostoj.
 write-PAS-EP-NPS should
 (20世紀は、モンゴルの歴史に記述されるべきである。) <ÖS: 1999.12.2.>

(2-17a, b)の主語、「舞台の幕」、「20世紀」は共に無生物である。他方、潜在的な補語は、語幹動詞の示す行為を遂行できる有生の行為主と考えられる。

対応する他動詞構文は、次のようになる。

- (2-18) a. **Xen negen n' tajz-nij xöšg-ijg alguur nee-ž baj-laa.**
 somebody:NOM 3PCL stage-GEN curtain-ACC gradually open-ICC be-RPST
 (誰かが舞台の幕を少しずつ開けていた。)
- b. **Xen negen n' XX zuun-ijg Mongoli-ijn tüüx-e-n-d**
 somebody:NOM 3PCL twenty century-ACC Mongolia-GEN history-EP-n-LOC
bič-i-x jostoj.
 write-EP-NPS should

(誰かが 20 世紀をモンゴルの歴史に記述すべきである。)

(2-18a, b)から(2-17a, b)の受動化の過程で、不特定の行為主は潜在化し、特定の被態主が主語の位置に収まる。

潜在的な補語を持つ受動構文の意味特徴をまとめると、次のようになる。

(2-19) 受動構文補語が潜在化するための条件

- a. 主語：[+/- animate, +/-specific]の被態主
- b. 補語：[+animate, -specific]の行為主
- c. 語幹動詞：行為タイプの他動詞

2.2.3. 完全自動詞化

受動構文の補語の潜在性そのものが消去される事例が存在する。

(2-20) a. **Bi xašaa-nij xaalga-nij xav'-d xür-eed nuu-gd-a-v.**
1SG:NOM pen-GEN gate-GEN nearby-LOC get to-PCC hide-PAS-EP-PST
(私は囲い小屋の戸口付近に着いてから隠れた／*隠された。) <AD>

b. **Exnij ödr-ijn barildaand D. Dagvadorž N. Cevegnjam nar jal-ž**
beginning day-GEN bout-LOC [name]:NOM [name]:NOM PL win-ICC
B. Batbajar jal-a-gd-žee.

[name]:NOM win-EP-PAS-PPST

(初日の取組で、D. ダグバドルジと N. ツェベグニャムたちは勝ち、B. バトバヤルは負けた／*勝たれた。) <ÖS: 2001.1.9.>

(2-20a, b)の受動形動詞の語幹は、通常の受動形動詞と同じく、nuu-「(もの/ひと)を隠す」、jal-「(勝負に) 勝つ」の意味の行為タイプの他動詞である。ところが、受動形接尾辞の付加した意味には<受身>の意味はなく、「隠れる」、「負ける」という非能格的(nergative)な行為動詞の意味を表示する。したがって、補語の潜在性を前提にして不特定主語を立てた他動詞構文を作ると、著しく適格性を欠く文を生じさせてしまう。

(2-21) a. **??Bi xašaa-nij xaalga-nij xav'-d xür-eed xen negen**
1SG:NOM pen-GEN gate-GEN nearby-LOC get to-PCC somebody:NOM
n' namajg nuu-v.
3PCL 1SG:ACC hide-PST

(私が囲い小屋の戸口付近に着いてから、誰かが私を隠した。)

b. **??Exnij ödr-ijn barildaand D. Dagvadorž N. Cevegnjam nar**
beginning day-GEN bout-LOC [name]:NOM [name]:NOM PL

jal-ž xen negen n' B. Batbajar-ijg jal-žee.

win-ICC somebody:NOM 3PCL [name]-ACC win-PPST

(初日の取組でD. ダグワドルジとN. ツェベグニヤムは勝ち、誰かがB. バトバヤルに勝った。)

(2-20a, b)の受動形動詞は、統語的にも意味的にも完全に自動詞化しているので、主語に何らの影響性も及ばない。むしろ、主語は自動詞構文の行為主である。

ここで注目したいのは、主語が有生である点である。(2-20a, b)と同じ形の構文で無生の主語が立つ場合、補語の行為主としての潜在性が残ってしまい、通常受動構文のように主語への影響性が生じる。

(2-22) a. **Dörvön žil-ijn xojno Brazil-d olimpijn naadam**

four+ year-GEN after Brazil-LOC Olympic festival:NOM

zoxjo-gd-o-no.

organize-PAS-EP-PRS

(4年後ブラジルでオリンピック大会が開催される。) <山越 2012: 177>

b. **1921 on-ooš ömnöx Mongol oron dax' xuv'sgalt temcl-ijn**

1921 year-ABL before Mongolia country in revolutionary struggle-GEN

tuxaj nom xevl-e-gd-e-n gar-laa.

about book:NOM publish-EP-PAS-EP-ASS come out-RPST

(1921年以前のモンゴル国における革命闘争に関する本が出版された : lit. 印刷されて出た。) <L: 166>

(2-22a, b)の主語、「オリンピック大会」、「本」は[-animate]である。これらは自らエネルギーを発動できないので、行為主にはなれない。むしろ、受動形動詞の語幹が示す行為の影響を受ける被態主の役割を担っている。このことは、受動構文に対応する不特定行為主主語の他動詞構文の適格性から確認できる。

(2-23) a. **Dörvön žil-ijn xojno Brazil-d xen negen n' olimpijn**

four+ year-GEN after Brazil-LOC somebody:NOM 3PCL Olympic

naadm-ijg zoxjo-no.

festival-ACC organize-PRS

(4年後ブラジルで誰かがオリンピック大会を開催する。)

b. **1921 on-ooš ömnöx Mongol oron dax' xuv'sgalt temcl-ijn**

1921 year-ABL before Mongolia country in revolutionary struggle-GEN

tuxaj nom-ijg xen negen n' xevl-e-n gar-laa.

about book-ACC somebody:NOM 3PCL publish-EP-ASS come out-RPST

(1921年以前のモンゴル国における革命闘争に関する本を誰かが出版した。)

以上から、完全自動詞化する受動構文の意味特徴をまとめると、次のようになる。

(2-24) 受動構文の完全自動詞化の条件

- a. 主語：[+animate, +specific]の行為主
- b. 補語：非顕在&非存在
- c. 動詞語幹：行為タイプの他動詞

2.2.4. 自発態の成立

形態 - 統語的にはプロトタイプでありながら意味は<受身>ではなく<自発>の文が散見される。

- (2-25) a. **Galt tereg-nij conx-oor nadad olon mal xar-a-gd-laa.**
train-GEN window-INS 1SG:DAT many cattle:NOM see-EP-PAS-RPST
(列車の窓から私にはたくさんの家畜が見えた。) <L: 128>
- b. **Tüünij üg nadad sajn sons-o-gd-o-ž baj-na.**
3SG:GEN word:NOM 1SG:DAT well hear-EP-PAS-EP-ICC be-PRS
(彼女の言葉は私によく聞こえている。) <AD>

(2-25a, b)には、主格形主語、与格形補語、受動形動詞の3つの構成素が備わっている。注目したいのは、語幹動詞の意味タイプで、xar-「～を見る」、sons-「～を聞く」は共に知覚動詞であり、(2-4B)の活動タイプに属している。これらの動詞に受動形接尾辞が付加すると、「見える」、「聞こえる」のように、(2-4C)の自発タイプに移行するのである。それに伴い、主語に被態主が割り当てられる一方で、補語には対象を知覚する経験主(Experiencer)が付与される。対応する他動詞構文は、次の通りである。

- (2-26) a. **Galt tereg-nij conx-oor bi olon mal xar-laa.**
tra-GEN window-INS 1SG:NOM many cattle:Ø look at-RPST
(列車の窓から私はたくさん家畜を見た。)
- b. **Bi tüünij üg-ijg sajn sons-o-ž baj-na.**
1SG:NOM 3SG:GEN word-ACC well listen to-EP-ICC be-PRS
(私は彼女の言葉をよく聞いている。)

(2-26a, b)のように能動形動詞になると、主語の側に知覚に対する意志性が生じるように思われる。他方、(2-25a, b)の受動構文では、1人称代名詞の経験主には無意志的な活動が働くと考えられる。

与格形補語の現れない活動タイプの語幹動詞を含む<自発>型受動構文もある。

- (2-27) a. **Bi ur'd n' tantaj xaa bilee neg uulz-a-ž**
 1SG:NOM before 3PCL 2SG:CMT where COR one meet-EP-ICC
baj-san šig san-a-gd-a-ž baj-na.
 be-PF like think-EP-PAS-EP-ICC be-PRS

(私は、以前、あなたとどこかで一度お会いしたような気がする。) <MYA: 27>

- b. **Gadaa ix cas or-sn-oos bolž zam**
 outside much snow:NOM fall-PF-ABL because of road:NOM
xar-a-gd-a-x-güj bol-o-v.
 see-EP-PAS-EP-NPS-NEG become-EP-PST

(外ではたくさんの雪が降ったせいで、道が見えなくなった。) <中嶋 2015: 108>

(2-27a)は[+animate, +specific]の主語と思考動詞 san-「～を思う」を語幹動詞とする受動構文である。一方、(2-27b)は[-animate, -specific]の主語と知覚動詞 xar-「～を見る」を語幹動詞とする受動構文である。どちらも語幹動詞は活動タイプ、補語は非頭在で、<自発>を表している。

非頭在的な補語は、前節で扱った完全自動詞化の場合と同じく、その潜在性は完全に消去されている。それは、対応する他動詞構文が不適格と判定される事実から確認できる。

- (2-28) a. ***Xen negen n' namajg ur'd n' tantaj xaa bilee**
 someone:NOM 3PCL 1SG:ACC before 3PCL 2SG:CMT where COR
neg uulz-a-ž baj-san šig san-a-ž baj-na.
 one meet-EP-ICC be-PF like think-EP-ICC be-PRS

(誰かが私を以前あなたと一度どこかで会ったように思っている。)

- b. ***Gadaa ix cas or-sn-oos bolž xen negen n'**
 outside much snow:NOM fall-PF-ABL because of somebody:NOM 3PCL
zam xar-a-x-güj bol-o-v.
 road:∅ see-EP-NPS-NEG become-EP-PST

(外ではたくさんの雪が降ったせいで、誰かが道を見なくなった。)

(2-28a, b)の不適格性から、(2-27a, b)の受動構文には元々対応する他動詞構文が存在しないことがわかる。(2-27a)では、「どこかであったような気がする」感情を引き起こすと同時にその影響を被るのは、主語自身である。したがって、経験主&被態主の意味役割を担う。(2-27b)では、主語「道」は、知覚が向かう対象であると同時にその影響を被る対象でもある。それゆえ、話題主(Theme)&被態主の意味役割を付与できる。

受動形動詞の語幹が行為タイプである例がある。この場合、与格形補語は全く現れない。

(2-29) a. **Xar xancuj n' ur-a-gd-a-ž navtar-san.**
black sleeve:NOM 3PCL tear-EP-PAS-EP-ICC become worn out-PF
(その黒い袖が破れてボロボロになった。) <AD>

b. **Alga urvuul-a-x xoorond ene asuudal**
palm:∅ turn back-EP-NPS between this problem:NOM
šijd-e-gd-čil-lee.
solve-EP-PAS-COMPL-RPST
(あつという間に{lit. 手のひらを返す間に}この問題は解決してしまった。)
<鯉淵 & ナラン 2012: 7>^[17]

(2-29a)の ur-「～を破る」は行為タイプの他動詞であるが、受動化しても「破られる」の意味はなく、自然な状態変化を示す<自発>の「破れる」の意味を持つ。(2-29b)の šijd-「～を解決する」も<受身>の「解決される」ではなく、<自発>の「解決する」の意味を帯びている。両文の主語は共に[-animate, +specific]である。

(2-29a, b)に与格形補語を加えると、それが顕在的であれ潜在的であれ、<自発>の意味は消え、代わりに<受身>の意味が現れる。

(2-30) a. **Xar xancuj n' Dorž-i-d /PRO ur-a-gd-a-ž**
black sleeve:NOM 3PCL [name]-EP-DAT tear-EP-PAS-EP-ICC
navtar-san.
become worn out-PF
(その黒い袖はドルジ／PRO に破られ、ボロボロになった。)

b. **Alga urvuul-a-x xoorond ene asuudal ter ojuutan-d**
palm:∅ turn back-EP-NPS between this problem:NOM that student-DAT
/PRO šijd-e-gd-čix-lee.
solve-EP-PAS-COMPL-RPST
(あつという間にこの問題はその学生に／PRO に解かれてしまった。)

したがって、(2-30a, b)の<受身>型受動構文には(2-31a, b)の対応する他動詞構文が設定できるが、(2-29a, b)の<自発>型にはそのような構文を立てることはできない。

(2-31) a. **Dorž /Xen negen n' xar xancuj-g-ijg ur-san.**^[18]
[name]:NOM/ somebody:NOM 3PCL black sleeve-EP-ACC tear-PF
(ドルジが／誰かが黒い袖を破った。)

b. **Alga urvuul-a-x xoorond ter ojuutan / xen negen n'**
palm:∅ turn back-EP-NPS between that student:NOM/ somebody:NOM 3PCL

ene asuudl-ijg šijd-čix-lee.
 this problem-ACC solve-COMPL-RPST

(あつという間にその学生が/誰かがこの問題を解いてしまった。)

(2-30a, b)の主格形主語は語幹動詞の示す行為の影響を被る被態主である。一方、(2-29a, b)の主格形主語も同様の影響を受けるが、それは主語自体の内発的要因によるのであるから、再帰性を帯びることになる。

因みに、行為タイプの他動詞語幹で、[+animate]主語を有する<自発>型受動構文は、現時点で見当たらない。

以上から、<自発>型受動構文の特徴をまとめると、次のようになる。

(2-32) <自発>型受動構文の特徴

- a. 主語：[+/- animate, +/-specific]の被態主
- b. 補語：①語幹が活動動詞：[+animate, +specific]の経験主 / 非顕在&非存在
 ②語幹が行為動詞：非顕在&非存在
- c. 語幹動詞：他動詞で活動/行為タイプ

活動動詞の方が行為動詞よりも<自発>型受動構文になりやすいように見えるが、客観的証拠に基づいた洞察ではない。また、具体的にどのような動詞が受動形接尾辞を伴って<自発>で用いられるのかについても、今後の研究が必要である。

2.3. まとめ

受動構文のプロトタイプと4つの非プロトタイプそれぞれの形態 - 統語的、および意味 - 機能的特徴を表にまとめると、以下のようになる。

表1 プロトタイプの特徴

	格形	意味役割	有生性	特定性	動詞の自/他	動詞意味タイプ
主語	主格	被態主	+/-	+/-	NA	NA
補語	与格	行為主/原動主	+/-	+/-	NA	NA
語幹	NA ^{#1}	NA	NA	NA	他動詞/自動詞 ^{#2}	行為/活動

★対応する他動詞構文：あり

#1: Not Applicable 「該当しない」の略記

#2: 自動詞の場合は語彙化する。

表2 非プロトタイプ(1)の特徴: 具格形補語

	格形	意味役割	有生性	特定性	動詞の自/他	動詞意味タイプ
主語	主格	被態主	-	+	NA	NA
補語	具格	行為主	+	+	NA	NA
語幹	NA	NA	NA	NA	他動詞	行為

★対応する他動詞構文: あり

表3 非プロトタイプ(2)の特徴: 非顕在的補語

	格形	意味役割	有生性	特定性	動詞の自/他	動詞意味タイプ
主語	主格	被態主	+/-	+/-	NA	NA
補語	潜在的 ^{#3}	行為主	+	-	NA	NA
語幹	NA	NA	NA	NA	他動詞	行為

★対応する他動詞構文: あり^{#4}

#3: 顕在化しないが含意される。

#4: ただし、不特定の「誰か」として具現する。

表4 非プロトタイプ(3)の特徴: 完全自動詞化

	格形	意味役割	有生性	特定性	動詞の自/他	動詞意味タイプ
主語	主格	行為主	+	+	NA	NA
補語	ゼロ ^{#5}	NA	NA	NA	NA	NA
語幹	NA	NA	NA	NA	他動詞	行為

☆対応する他動詞構文: なし

#5: 非顕在でかつ非存在である。

表5 非プロトタイプ(4)の特徴: <自発>

	格形	意味役割	有生性	特定性	動詞の自/他	動詞意味タイプ
主語	主格	被態主	+/-	+/-	NA	NA
補語	与格 ^{#6}	経験主	+	+	NA	NA
	ゼロ	NA	NA	NA	NA	NA
語幹	NA	NA	NA	NA	他動詞	活動 行為

★/☆対応する他動詞構文: ①顕在的補語: あり

②補語がゼロ：なし

#6: 活動動詞に限り与格形補語が顕在化する場合がある。

プロトタイプ受動構文は、表 1 に記された形態 - 統語的、並びに意味 - 機能的特徴をすべて備えて初めて成立する構文である。それに比して、4 つの非プロトタイプ受動構文は、その特徴のうちいくつかを変じていたり、欠いていたりする。5 つの受動構文すべてに共通しているのは、主語が主格形であることと、構文が自動詞構文であることの 2 点のみである。

3. <受身>型使役構文

3.1. 先行研究とその問題点

モンゴル語には、使役構文が<受身>の意味を表す場合がある(アリオナ(2008)、金岡(2009)、山越(2012)、Janhunen(2012))。Janhunen(2012: 250)は、「受動構文と使役構文の自然な結びつきは、与格形補語の相似用法(analogous use)により生み出される」と説明する。すなわち、与格形補語が受動構文と使役構文の双方で行為主を標示するところに、<受身>の意味の生成の根拠を求めらるのである。

(3-1) a. **Manaj xon' čono-n-d id-üül-sen.**^[19]

1PL:GEN sheep:NOM wolf-n-DAT eat-CAUS-PF

(私たちの羊は狼に食べられた。) <Janhunen 2012: 250>

b. **Tatatunga mongol-ijn cereg-t barivčl-a-gd-žee.**^[20]

[name]:NOM Mongol-GEN army-DAT capture-EP-PAS-PPST

(タタトンガはモンゴル軍に捕えられた。) <S&B: 205>

(3-1a)の使役構文でも(3-1b)の受動構文でも、与格形補語は行為主であり、共に<受身>を表している。ところが、補語の格形の同一性による説明は、次の文に見るように、<受身>の意味を表示しながら与格形補語を取らない使役構文があるため、支持できない。

(3-2) a. **Mongol-ijn ard tumen xuv'sgal xij-xd-ee MAXN-aar**

Mongol-GEN people revolution:NOM occur-TM-REF Mongolian Revolutionary

udird-uul-san jum.

Party-INS lead-CAUS-PF ASR

(モンゴル人民革命が起こったとき、[それは]モンゴル人民革命党によって導かれたのである。) <AD>

b. **Xeden on-d Moskva baj-g-uul-san ve?**

which (of a series) year-LOC Moscow:NOM be-EP-CAUS-PF Q

(何年にモスクワは建設されましたか。) <Skvodumova 2002: 109>

(3-2a)の行為主を担う補語は与格形ではなく具格形である。(3-2b)は行為主が不特定であるため、補語が具現していない。

使役構文の<受身>用法へのもう1つの有力な説明は、行為主による行為の主語への影響の直接性/間接性に根拠を求めるものである。山越(2012)は、「行為者Aによる行為の影響がX(使役主=主語)に間接的に及ぶ場合」、使役形動詞は<使役>の意味を持つのに対し、「行為の影響を直接受ける場合」、<受身>の意味を持つと述べる。

(3-3) a. **Tavan xüü n' xoni-nij max id-sen.**
five+ son:NOM 3PCL sheep-GEN meat:∅ eat-PF
(その5人の息子は羊肉を食べた。) <AD>

b. **Ex n' xoni-nij max tavan xüü-d-ee id-üül-sen.**
mother:NOM 3PCL sheep-GEN meat:∅ five+ son-DAT-REF eat-CAUS-PF
(その母親は羊肉を自分の5人の息子に食べさせた。) <AD>

(3-4) a. **Čono xurga id-sen.**
wolf:NOM lamb:∅ eat-PF
(狼が子羊を食べた。)

b. **Xurga čono-n-d id-üül-sen.**
lamb:NOM wolf-n-DAT eat-CAUS-PF
(子羊が狼に食べられた。) <a, b とも山越 2012: 256>

(3-3a)と(3-4a)は、各々、使役構文(3-3b)と(3-4b)に対応する他動詞構文である。(3-3b)と(3-4b)の行為主はどちらも与格形補語であるばかりか、使役形動詞は全く同じである。ところが、(3-3b)が<使役>を表すのに対し、(3-4b)は<受身>を意味する。山越(2012)によると、(3-3b)では「羊肉を食べる」行為を行うのは専ら「5人の息子」であり、主語の「母親」はその行為を引き出す原動主の役割を担うだけで、行為自体には間接的にしか関与していない。一方、(3-4b)では、主語の「子羊」は行為主「狼」の「食べる」行為の被態主であり、直接的に影響を受けている。

この説明には、次のような反例がある。

(3-5) a. **Ta nar surguuli-aa tögs-ö-vč meclleg bolovsrol-oo**
2SG:NOM PL school-REF finish-EP-CNCES knowledge:∅ education-REF
jamagt deeš-üül-ž baj-x jostoj.
always get higher-CAUS-ICC be-NPS should
(あなたたちは学業を終えても、自らの知識や教養を常に向上させるべきである。)
<K & Ts: 163>

- b. **Ijm učraas üxer sürg-ijg ösg-ö-n olšir-uul-ž**
 for this reason cow herd-ACC bring up-EP-ASS increase in number-CAUS-ICC
ašig šim-ijg nemegd-üül-e-x xeregtej.
 profit:Ø nutritious thing-ACC increase-CAUS-EP-NPS necessary

(このようなわけで、牛の群れを育てて数を増やし、利益や栄養物を増加させなければならぬ。) <AD>

(3-5a)は、自動詞語幹に使役形接尾辞が付いて使役形動詞を形成している。この使役構文には行為主が存在しないだけでなく、「向上させるべき」対象として主語の「あなたたち」に影響が直接及ぶと解釈できる。(3-5b)は、原動主の主語も行為主の補語も現れない事態文なので、そもそも影響性の観点からの分析とはなじまない。

アリオナ(2008: 43-44)は、<受身>型の使役構文を「間接受身文(持ち主の受身)」と捉え、次のように規定する。

(3-6) モンゴル語の間接受身文

- a. 特徴：接辞「-GD-」は現れず、接辞「-UUL-」だけが現れる^[21]。
- b. 意味：「利害」を表す。

(3-6b)の「利害」は、(3-7a)のように否定的(被害/迷惑)であっても、(3-7b)のように肯定的(受益)であってもよい。

- (3-7) a. **Aav xulgajč-i-d xamag möngö-ö sujł-uul-san.**
 father:NOM thief-EP-DAT all money-REF put one's hand in-CAUS-PF
 (父は泥棒に自分のすべてのお金をすられた。) <アリオナ 2008: 44>
- b. **Tanakasan bagš-i-d tolgoj-g-oo il-üül-sen.**
 [name]:NOM teacher-EP-DAT head-EP-REF caress-CAUS-PF
 (田中さんは先生に自分の頭を撫でられた。) <アリオナ 2008: 44>

(3-7a)では、与格形補語の行為主が主格形主語の所有物の「お金」に語幹動詞の行為を行わせることで、その影響を主語が間接的に被るという読みを成立させる。(3-7b)も同様の解釈を持つ。両者の唯一の違いは、語幹動詞と直接目的語との関係により生ずる影響の性質の違いだけである。(3-7a)では「お金をすられる」という否定的な影響を主語が被るので被害/迷惑を、(3-7b)では「頭を撫でられる」という肯定的な影響を受けるので受益を表すと考えられるのである。

使役構文の<受身>用法を「間接受身文」の観点からアプローチする方法自体には一定の妥当性を認めることができる。ただし、まだ克服すべき問題点が、少なくとも2つある。第1の問題点は、使役構文の<受身>が担うとされる影響の間接性と行為主の義務性をめぐる

ものである。アリオナ(2008: 47)は、使役構文が<受身>を表すには「動作主(行為主)は存在しなければならない」と規定するが、実際には、存在しないにもかかわらず<受身>の意味を有する使役構文が観察できる^[22]。

- (3-8) Činij-xee tölöö zagn-uul-a-x n' bajtugaj
2SG:GEN-REF for the sake of scold-CAUS-EP-NPS 3PCL not only
šijtg-üül-sen č aj-x jum alga.
punish-CAUS-PF but also be afraid of-NPS thing:Ø there's not
(君のために叱られるばかりか処罰されても、恐れることはありません。)
<中嶋 2015: 59>

(3-8)は、他動詞語幹 zagn-「～を叱る」および šijtg-「～を処罰する」に使役形接尾辞が付いて<受身>を表しているにもかかわらず、行為主を担う補語は現れていない。

第2の問題点は、(3-7a, b)と全く同じ文型であっても<受身>の意味にならない事例が数多く見受けられることである。

- (3-9) a. Egč oxin-d-oo dulaan deel-ee öms-gö-v.
mother:NOM daughter-DAT-REF warm gown-REF wear-CAUS-PST
(母親は自分の娘に自分の暖かい上着を着せた。) <AD>
b. Bi ter üsčün-d üs-ee zas-uul-san.
1SG:NOM that barber-DAT hair-REF cut one's hair-CAUS-PF
(私はその床屋に自分の髪を切ってもらった。) <AD>

(3-9a)は「～させる」の<使役>の意味を、(3-9b)は「～してもらう」の<受益>の意味を表すが、<受身>の意味は持っていない。それにもかかわらず、文型は(3-7a, b)と全く同一である。

以上、主な先行研究とそれが抱える問題点を概観してきたわけだが、そもそも使役構文がいかなる理由で<受身>の意味を獲得するようになったのか、また、使役構文という一定の構文の中で<受身>型がどのような位置を占めるのかについて、明確な説明がされてこなかった。橋本(2019)は使役構文の表示する<行為>、<使役>、<受益>の3つの異なる意味を、形態-統語的および意味-機能的側面から分析する作業を通して、それぞれの特有の特徴を特定し、3者間の相互関係を明らかにした。<受身>についても、同じ構文を共有する事実から推して、当然、この3つの意味と関連するとの予測を立てることができる。ただし、<行為>型使役構文は、主に動詞の意味タイプの変換と構文の交替に関わっており、本稿で扱っているヴォイスの特徴とは直接に関係しないので、考察の対象からはずすこととする(詳細については、橋本 2019 を参照のこと)。そこで、使役構文の<受身>用法を、形態-統語的および意味-機能的の双方から考察し、その特徴を特定し、<使役>用法と<受益>

用法と比較しつつ、構文上の位置づけを解明していきたい。併せて、第2節で扱った受動構文との関係を明らかにしたい。

3.2. 〈受身〉型使役構文

3.2.1. 与格形補語をとる構文

- (3-10) a. **Zorig** **xün-d** **al-uul-čix-a-žee.**
 [name]:NOM someone-DAT kill-CAUS-COMPL-RPST
 (ゾリグは何者かに殺害されてしまった。) <ÖS: 2000.9.27.>
- b. **Ter mor'** **nadad** **un-uul-san.**
 that horse:NOM 1SG:DAT ride-CAUS-PF
 (その馬は私に乗られた。) <K & Ts: 123>
- c. **Ceren** **boroo-n-d** **coxi-uul-a-v.**
 [name]:NOM rain-n-DAT hit-CAUS-EP-PST
 (ツェレンは雨に打たれた。) <AD>

(3-10a, b, c)はすべて〈受身〉を意味する使役構文である。文型は主格形主語＋与格形補語＋使役形動詞から成る自動詞構文である。主語はどれも[+animate, +specific]名詞句で、語幹動詞の示す行為の影響を直接被る被態主である。他方、補語の有生性と特定性は各文で異なる。(3-10a)では[+animate, -specific]、(3-10b)では[+animate, +specific]、(3-10c)では[-animate, -specific]となっている。(3-10a, b)の補語は行為主の役割を付与されるが、(3-10c)には適用できない。ただし、「雨」が自ら落下というエネルギーを発揮する実体と捉えるならば、原動主の意味役割を担うことが可能になる。語幹動詞 al-「～を殺害する」、un-「～に乗る」、coxi-「～を叩く」はすべて行為タイプの他動詞である。

(3-10a, b, c)に対応する他動詞構文は、次の通りである。

- (3-11) a. **Xün** **Zorig-ijg** **al-čix-žee.**
 someone:NOM [name]-ACC kill-COMPL-PPST
 (誰かがゾリグを殺害してしまった。)
- b. **Bi** **ter mori-jg** **un-san.**
 1SG:NOM that horse-ACC ride-PF
 (私はその馬に乗った。)
- c. **Boroo** **Ceren-ijg** **coxi-v.**
 rain:NOM [name]-ACC hit-PST
 (雨がツェレンを叩いた。)

(3-11a, b, c)の主格形主語は行為主/原動主であり、対格形直接目的語は被態主である。(3-11)と(3-10)の対応関係は、次のようになる。

(3-12) 他動詞構文と<受身>型使役構文の対応関係

[主語：主格形] + [直接目的語：対格形] + [動詞：他動詞]

[使役主語：主格形] + [使役補語：与格形] + [使役動詞：自動詞]

他動詞構文の対格形直接目的語は使役構文の主格形主語と、主格形主語は与格形補語と、各々意味役割を保持したまま、交差する形で交替する。それに伴って、動詞は他動詞から自動詞へ移行する。

では、使役構文がいわばプロトタイプの<使役>型と<受身>型に分かれる要因は何だろうか。

(3-13) a. **Gerel Bat-ijg šönö ir-üül-sen.**

[name]:NOM [name]-ACC night come-CAUS-PF

(ゲレルはバトを夜来させた。) <AD>

b. **Bi xüüxd-üüd-ee ert unt-uul-dag.**

1SG:NOM child-PL-REF early sleep-CAUS-HBT

(私は自分の子供たちを早くに寝かせることにしている。) <K & Ts: 122>

(3-13a, b)は、「～させる」の<使役>を意味する文であるが、補語は<受身>の場合と異なり、与格形ではなく対格形か再帰所有形をとっている。これを与格形に替えると、不適格な文になる。

(3-14) a. ***Gerel Bat-a-d šönö ir-üül-sen.**

[name]:NOM [name]-EP-DAT night come-CAUS-PF

b. ***Bi xüüxd-üüd-e-d-ee ert unt-uul-dag.**

1SG:NOM child-PL-EP-DAT-REF early sleep-CAUS-HBT

使役形動詞の語幹に目を転じると、(3-13a)の ir-「来る」、(3-13b)の unt-「寝る」共に自動詞である。それゆえ、対応する文は自動詞構文ということになる。

(3-15) a. **Bat šönö ir-sen.**

[name]:NOM night come-PF

(バトが夜来た。)

b. **Minij xüüxd-üüd ert unt-dag.**

1SG:GEN child-PL:NOM early sleep-HBT

(私の子供たちは早く寝ることにしている。)

(3-15a, b)が使役化する過程で、新たに使役の原動主として主格形主語が導入され、自動詞構文の主語は行為主として対格形/再帰所有形の補語と交替するのである。

(3-13a, b)の語幹動詞の意味タイプは行為であるが、〈受身〉型とは違って、活動、自発、状態であってもよい。

- (3-16) a. **Minij xüü sajn sur-č aav eež-ijg-ee bajar-uul-laa.**
 1SG:GEN son:NOM well study-ICC parents-ACC-REF be glad-CAUS-RPST
 (私の息子はよく勉強して、自分の両親を喜ばせた。) <L: 120>
- b. **Boroo nogoo urg-uul-dag.**
 rain:NOM grass:Ø grow-CAUS-HBT
 (雨は草を成長させる。) <AD>
- c. **Bi šine tergen-d-ee neg čirүүл toxir-uul-ž baj-na.**
 1SG:NOM new cart-LOC-REF one trailer:Ø match-CAUS-ICC be-PRS
 (私は自分の新しい荷車に1台のトレーラーをつないでいる。) <AD>

語幹動詞はすべて自動詞で、(3-16a)の *bajarl-*「喜ぶ」が活動、(3-16b)の *urg-*「成長する」が自発、(3-16c)の *toxir-*「合う」が状態の意味タイプに属している。

「～してもらう」を表す〈受益〉型使役構文では、〈受身〉型と同様に、補語が与格形で実現する。

- (3-17) **Övčtön bariaač-i-d bari-uul-a-v.**
 patient:NOM masseur-EP-DAT treat-CAUS-EP-PST
 (患者は接骨医に治療してもらった。) <K & Ts: 128>

(3-17)の語幹動詞は行為タイプの他動詞で、次の他動詞構文を作る。

- (3-18) **Bariaač övčtön-ijg bari-v.**
 masseur:NOM patient-ACC treat-PST
 (接骨医が患者を治療した。)

(3-18)の主格形主語が(3-17)の与格形補語に、対格形直接目的語が主格形主語に交差する形で交替する。これは、(2-3)の他動詞構文と受動構文、(3-12)の他動詞構文と〈受身〉型使役構文の対応関係と同じである^[23]。

3.2.2. 具格形補語をとる構文

行為主補語の格形が具格形の〈受身〉型使役構文が存在する。

- b. **Manaj-x tand daxjaad üjlčil-ij.**^[24]
 1PL:GEN-POS:NOM 2SG:DAT again serve-VLNT
 (私どもはあなたにもう一度サービスしましょう。)

(3-19a, b)の<受身>型使役構文に対応する構文の目的語が(3-21a, b)のように対格形であるのに対し、(3-20a, b)の<使役>型では(3-22a, b)で示すように与格形をとっている。

<受益>型使役構文でも、補語に具格形の現れる文がある。

- (3-23) a. **Bi ter emč-eer emčl-üül-ž baj-v.**
 1SG:NOM that doctor-INS treat-CAUS-ICC be-PST
 (私はその医者に治療してもらった。) <AD>
- b. **Aav n' eež-eer n' tüš-üül-ž üüden**
 father:NOM 3PCL mother-INS 3PCL support-CAUS-ICC door+
deer-ee gar-č ir-žee.
 on-REF go out-ICC come-PPST
 (彼女の父親は彼女の母親に支えてもらって、ドアから出て行った。)
 <Austin et al: 1997: 43>

(3-23a, b)は行為タイプの他動詞 emčl-「～を治療する」、tüš-「～を支える」を語幹としているが、補語は双方とも具格形である。

対応する他動詞構文は、次の通りである。

- (3-24) a. **Ter emč namajg emčil-ž baj-v.**
 that doctor:NOM 1SG:ACC treat-ICC be-PST
 (その医者は私を治療していた。)
- b. **Eež n' aav-ij(g) n' tüš-žee.**
 mother:NOM 3PCL father-ACC 3PCL support-PPST
 (彼女の母親は彼女の父親を支えた。)

使役化の過程で、(3-24a, b)の主格形主語は(3-23a, b)の具格形補語に、対格形直接目的語は主格形主語に交差する形で交替する。これは、(3-21a, b)の他動詞構文と(3-19a, b)の<受身>型使役構文の対応関係と同じであるばかりか、プロトタイプの受動構文と対応する他動詞構文との関係とも一致する。

3.2.3. 与格形補語と直接目的語を含む構文

- (3-25) a. **Bi eež-d-ee xacr-aa algad-uul-laa.**
 1SG:NOM mother-DAT-REF cheek-REF slap-CAUS-RPST

(私は自分の母親に自分の頬をびんたされた。) <山越 2012: 260>

b. **Kujejt Irak-t gazar nutg-aa bulaa-lga-v.**

Kuwait:NOM Iraq-DAT territory-REF capture-CAUS-PST

(クウェートはイラクに自国の領土を侵略された。) <K & Ts: 129>

c. **Aav xulgajč-i-d xamag möngö-ö sujl-uul-san.**

father:NOM thief-EP-DAT all money-REF steal-CAUS-PF

(父は泥棒に自分のすべてのお金を盗まれた。) <アリオナ 2008: 44>

(3-25a, b, c)は<受身>型使役構文である。行為主と与格形補語が担い、(3-25a)では[+animate, +specific]、(3-25b)では[-animate, +specific]、(3-25c)では[+animate, -specific]の意味特性を持っている。被態主は、主格形主語と再帰所有形直接目的語の双方が担っており、語幹動詞の示す行為の影響を、等分にはないにせよ、被っているように思われる。

着目したいのは、主語と直接目的語との間に成立する意味関係である。(3-25a)では直接目的語「頬」は主語「私」の身体部位であり、両者は不可分離的所有(inalienable possession)の関係にある。(3-25b)の直接目的語「領土」も主語「クウェート」の不可分離的な構成要素である。一方、(3-25c)の直接目的語「お金」と主語「父」との間には、所有物と所有者という分離的所有(alienable possession)の関係が成立する。ただし、主語にとって直接目的語の指示対象は大切な持ち物であり、両者の間には密接な所有(intimate possession)関係が成立している。

(3-25a, b, c)に見られるような不可分離的もしくは密接な所有関係が主語と直接目的語の間に成立しない場合、次のような不適格な文が生じてしまう。

(3-26) a. ***Bi ter noxoj-d jörönxijlögč-ijn xöl-ijg doloo-lgo-son.**

1SG:NOM that dog-DAT president-GEN leg-ACC lick-CAUS-PF

(私はその犬に大統領の足をなめられた。)

b. ***Minij xüüxed eež-d-ee angli xel-nij bagš-ijn**

1SG:GEN child:NOM mother-DAT-REF English-GEN teacher-GEN

xacr-ijg algad-uul-laa.

cheek-ACC slap-CAUS-RPST

(私の子供は自分の母親に英語の先生の頬をびんたされた。)

(3-26a)の「私」と「大統領の足」および、(3-26b)の「私の子供」と「英語の先生の頬」との間には、不可分離的な所有関係も密接な所有関係も成立しない。

以上から、(3-25)の文型の<受身>型使役構文の主語、補語、直接目的語の行為連鎖(action chain)は、次のようになる。

き起こししやすい所有 (empathy-incited possession) は不可分離的所有に準ずるもの (quasi-inalienable possession) と捉えることが可能である。

以上のことを踏まえて(3-29)の適用条件を書き換えると、次の2点に縮約できる。

(3-30) <間接的受身>を表す使役構文の適用条件

- a. 主語と直接目的語との間に不可分離的所有関係が成立する場合。
- b. 主語と直接目的語との間に共感喚起的な所有関係が成立する場合。

与格形補語と再帰所有形直接目的語の現れる文型は、<受益>型使役構文でも用いられる。

(3-31) a. **Bi xanjaad xür-eed, tolgoj övd-ööd, xaluur-aad baj-san**
1SG:NOM catch a cold-PCC head:NOM hurt-PCC have a fever-PCC be-PF
učir xičeel-ijn daraa emneleg-t oč-i-ž emč-i-d
because lesson-GEN after hospital-LOC go-EP-ICC doctor-EP-DAT
bij-ee üz-üül-lee.

body-REF see-CAUS-RPST

(私は風邪を引いて、頭が痛くて、熱があったので、放課後、病院へ行って、医者
に自分の身体を診てもらった。) <AD>

b. **Bi sonin setgüül-d medee, ögüülel, šülg-ee**
1SG:NOM newspaper magazine-DAT report article poem-REF
nijtl-üül-ž baj-san.
publish-CAUS-ICC be-PF

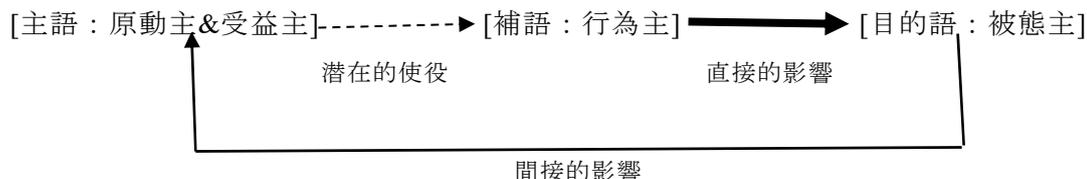
(私は新聞や雑誌に自分のレポートや記事、詩を掲載してもらった。) <AD>

(3-31a)では、[+animate, +specific]の与格形補語が行為主として行為タイプの他動詞語幹の示す行為を再帰所有形目的語に行使することで、その行為の結果を主格形主語が受益・恩恵として間接的に受け取ると解釈される。したがって、主語は被態主ではなく受益主 (Beneficiary)ということになる。直接目的語は身体部位であり、主語との間に不可分離的所有関係を成立させる。

同様に、(3-31b)でも、[-animate, +specific]の与格形補語が行為主として「出版する」行為を再帰所有直接目的語に直接及ぼすことで、主格形主語がその結果の受益・恩恵を間接的に受け取ることになる。直接目的語は主語が生み出した創作物であるのだから、両者の間には共感喚起的な所有関係が成立する。

以上から、(3-31a, b)のような<受益>型使役構文の行為連鎖は、次に記す通りである。

(3-32) 直接目的語を有する<受益>型使役構文の行為連鎖



(3-32)と(3-27)の顕著な相違は、前者が潜在的に何らかの使役による働きかけを補語にしているのに対し、後者ではそのような働きかけが一切なく、行為主としての補語から行為連鎖が始まる点である。

<受益>型使役構文では<受身>型と異なり、補語の格形は与格形よりも具格形の方が好まれる傾向がある。

(3-33) a. **Bi Dulmaa-g-aar neg nom avčir-üül-e-v.**

1SG:NOM [name]-EP-INS one book:Ø bring-CAUS-EP-PST

(私はドルマーに1冊本を持ってきてもらった。) <AD>

b. **Ajuuš örgödl-öö Dašdondog-oor bič-üül-e-v.**

[name]:NOM application form-REF [name]-INS write-CAUS-EP-PST

(アヨーシは自分の申込書をダシドンドグに書いてもらった。)

<Baatarsukh 2009: 54>

c. **Bid ene nom-ijg ulsijn xevel-ijn kombinat-aar**

1PL:NOM this book-ACC national publication-GEN combinat-INS

xevl-üül-e-x gež baj-na.

publish-CAUS-EP-NPS be about to-PRS

(私たちはこの本を国立出版局に出版してもらおうとしている。) <L: 120>

(3-33a, b, c)は行為主が具格形で実現している。(3-33a, b, c)の主語は人称代名詞と固有名詞なので、[+animate, +specific]の特性を付与される。これらの主語は、語幹動詞の行為の影響を間接的に受ける受益主である。具格形補語は、(3-33a, b)では[+animate, +specific]である。(3-33c)は「国立出版局」なので[-animate, +specific]である。直接目的語は行為を直接被る被態主である。(3-33a)は不定のゼロ格形なので[-animate, -specific]、(3-33b)は再帰所有形、(3-33c)は対格形で、双方とも[-animate, +specific]を指定される。3つの文の動词语幹は他動詞である。

各使役構文の3つの項が語幹動詞の示す行為を介して(3-32)の行為連鎖に則って<受益>を表すわけである。この点では、(3-31a, b)と変わらない。唯一の相違点は、主語と直接目的語の所有関係にある。(3-33a)の「私」と「1冊の本」、(3-33b)の「アヨーシ」と「申込書」、(3-33c)の「私たち」と「この本」との間には、不可分離的もしくは共感喚起的な所有関係は成立し難いと考えられる。

<使役>型使役構文にも、与格形補語と直接目的語を含むものがある。

- (3-34) a. **Dorž** **xüü-d-ee** **süü** **uu-lga-v.**
[name]:NOM son-DAT-REF milk:∅ drink-CAUS-PST
(ドルジは自分の息子にミルクを飲ませた。) <K & Ts: 119>
- b. **Bagš** **nadad** **bičig** **unš-uul-a-v.**
teacher:NOM 1SG:DAT writing:∅ read-CAUS-EP-PST
(先生は私に書物を読ませた。) <AD>

(3-34a, b)の主格形主語は[+animate, +specific]の原動主で、補語が行為を開始するためのきっかけ(trigger)を提供する。与格形補語は共に[+animate, +specific]で、原動主からの働きかけを強く受ける点で被態主、実際に直接目的語に行為を遂行する点で行為主という二重の意味役割を担っている。直接目的語はゼロ格形で[-animate, -specific]の被態主である。使役形動詞の語幹は、(3-34a)の uu-「～を飲む」、(3-34b)の unš-「～を読む」は行為タイプの他動詞である。主語と直接目的語との所有関係は、(3-34a)では「ドルジ」と「ミルク」、(3-34b)では「先生」と「書物」で、不可分離的な、あるいは共感喚起的な、所有関係にはない。

補語に具格形を有する例も数多くある。

- (3-35) a. **Bagš** **tüüneer** **sambar** **širee** **arč-uul-a-v.**
teacher:NOM 3SG:INS blackboard:∅ desk:∅ wipe-CAUS-EP-PST
(先生は彼女に黒板と机を拭かせた。) <K & Ts: 118>
- b. **Minij** **naiz** **nadaar** **cag-aa** **zas-uul-a-v.**
1SG:GEN friend:NOM 1SG:INS watch-REF repair-CAUS-EP-PST
(私の友人は私に自分の時計を修理させた。) <K & Ts: 123>
- c. **Ter** **čamajg** **nadaar** **üns-üül-lee.**
3SG:NOM 2SG:ACC 1SG:INS kiss-CAUS-RPST
(彼女は私をきみにキスさせた。) <K & Ts: 129>

(3-35a, b, c)の主語はすべて[+animate, +specific]の原動主、具格形補語は[+animate, +specific]の被態主&行為主である。直接目的語は、(3-35a)では[-animate, -specific]のゼロ格形が、(3-35b)では[-animate, +specific]の再帰所有形が、(3-35c)では[+animate, +specific]の対格形が、それぞれ現れている。ただし、3者の意味役割はすべて被態主である。語幹動詞の arč-「～を拭く」、zas-「～を修理する」、üns-「～にキスする」は行為タイプに属する他動詞である。主語と直接目的語の所有関係は、(3-35a)の「先生」と「黒板と机」、(3-35b)の「友人」と「時計」、(3-35c)の「彼女」と「君」に見るように、不可分離的でも共感喚起的でもない。

<使役>型使役構文の行為連鎖は、次の形をとる。

(3-36) 補語と直接目的語を有する<使役>型使役構文の行為連鎖



原動主の主語は補語に行為のきっかけとなる影響を及ぼす。その点で、語幹動詞の示す行為に対しては間接的な関係にとどまる。一方、補語は原動主からの働きかけを受けて実際に行為をすることで、目的語に直接的な影響を与える。

3.3. まとめ

<受身>型使役構文を、格形、意味役割、有生性、特定性、自動詞/他動詞、動詞の意味タイプ、所有関係の7つの形態 - 統語的および意味 - 機能的特徴から、<使役>型と<受益>型と比較しながら分析してきたのであるが、その結果を以下の表にまとめることができる。

文型 A：主語 + 補語 + 動詞

表 1：<受身>型使役構文

	格形	意味役割	有生性	特定性	動詞の自/他	動詞意味タイプ
主語	主格	被態主	+/-	+	NA	NA
補語	与格/具格	行為主/原動主	+/-	+/-	NA	NA
語幹	NA	NA	NA	NA	他動詞	行為

表 2：<受益>型使役構文

	格形	意味役割	有生性	特定性	動詞の自/他	動詞意味タイプ
主語	主格	受益主	+	+	NA	NA
補語	与格	行為主	+	+	NA	NA
語幹	NA	NA	NA	NA	他動詞	行為

表 3：<使役>型使役構文

	格形	意味役割	有生性	特定性	動詞の自/他	動詞意味タイプ
主語	主格	原動主	+/-	+/-	NA	NA
補語	与格/具格	行為主/経験主 /話題主	+/-	+/-	NA	NA
語幹	NA	NA	NA	NA	自動詞/他動詞	行為.活動/自発 /状態

文型 B : 主語 + 補語 + 直接目的語 + 動詞

表 4 : <受身>型使役構文

	格形	意味役割	有生性	特定性	動詞の自/他	動詞意味タイプ	所有関係
主語	主格	被態主	+/-	+	NA	NA	○ ^{#1}
補語	与格	行為主	+/-	+	NA	NA	NA
直目	再帰所有	被態主	+/-	+	NA	NA	○
語幹	NA	NA	NA	NA	他動詞	行為	NA

#1 ○ : 主語と直接目的語との間に不可分離的もしくは共感喚起的な所有関係が成立する。

表 5 : <受益>型使役構文

	格形	意味役割	有生性	特定性	動詞自/他	動詞意味タイプ	所有関係
主語	主格	受益主	+	+	NA	NA	× ^{#2}
補語	与格/具格	行為主	+/-	+	NA	NA	NA
直目	ゼロ格/対格 /再帰所有	被態主	+/-	+/-	NA	NA	×
語幹	NA	NA	NA	NA	他動詞	行為	NA

#2 × : 主語と直接目的語との間に不可分離的もしくは共感喚起的な所有関係が成立しない。

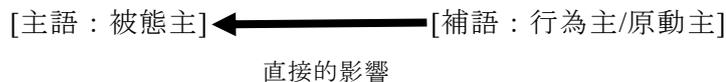
表 6 : <使役>型使役構文

	格形	意味役割	有生性	特定性	動詞自/他	動詞意味タイプ	所有関係
主語	主格	原動主	+	+	NA	NA	×
補語	与格/具格	被態主 &行為主	+	+	NA	NA	NA
直目	ゼロ格/対格 /再帰所有	被態主	+/-	+/-	NA	NA	×
語幹	NA	NA	NA	NA	他動詞	行為	NA

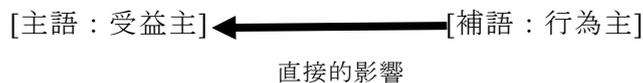
行為連鎖は、次のようになる。

文型 A：主語＋補語＋動詞

A-1. <受身>型使役構文



A-2. <受益>型使役構文

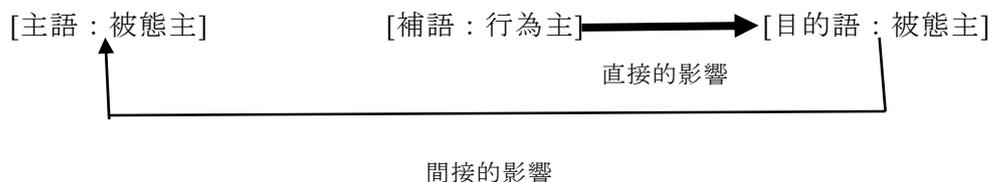


A-3. <使役>型使役構文

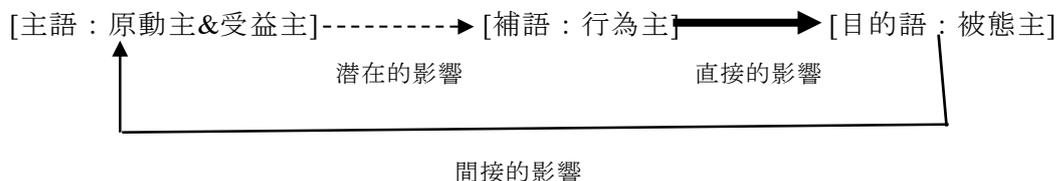


文型 B：主語＋補語＋直接目的語＋動詞

B-1. <受身>型使役構文



B-2. <受益>型使役構文



B-3. <使役>型使役構文



主語と補語で構成される文型 A では、A-1 の<受身>型と A-2 の<受益>型が共に補語の行為主から主語の被態主へ直接的な影響を及ぼす点で共通している。一方、A-3 の<使役>型では、影響は主語から補語へと順行で働く。

直接目的語を含む文型 B でも、B-1 の<受身>型と B-2 の<受益>型に共通性が見出せる。<受身>型では、主語と補語の間には連鎖はない。補語の行為主を出発点として、その働きを目的語が直接受け、その結果の影響が間接的に主語に及ぶ。<受益>型では主語から補語への影響は潜在的なものにとどまるため、実質的にはやはり補語から目的語への直接的な働きかけと、その結果の主語への間接的な影響という連鎖を呈示する。両者の重要な相違点は、主語と目的語間の所有関係にある。<受身>型には不可分離的/共感喚起的な所有関係が成立するのに対し、<受益>型では成立しない。他方、B-3 の<使役>型では、行為連鎖は、主語から補語を介して目的語へと順行的に働くと同時に、不可分離的/共感喚起的な所有

関係は全く関与しない。

以上の事実を踏まえると、＜受身＞型使役構文は＜受益＞型から派生したように見える。＜受益＞型に較べ＜受身＞型では、受益や恩恵の意味に限定されず広範囲に渡る行為主から被態主への影響性を包摂していった結果、被害/迷惑などの＜受益＞型とは正反対の意味をも表示できるようになったと推察することができるのである。

4. 結論

＜受身＞の意味を表す受動構文と使役構文の形態 - 統語的および意味 - 機能的特徴を比較してみると、興味深い共通点と相違点のあることに気づく。それを表にまとめると、以下のようになる。

A. プロトタイプ受動構文と補語のみを含む＜受身＞型使役構文との比較

表1 構文と語幹動詞

	構文タイプ	語幹動詞の自/他	語幹動詞意味タイプ	対応他動詞構文
受動構文	自動詞: S+C+V	他動詞	行為/活動 ^{#1}	あり
使役構文	自動詞: S+C+V	他動詞	行為 ^{#2}	あり

#1: 具格形補語の場合、行為タイプのみである。

#2: データ数がもっと増えれば活動タイプが見つかるかもしれない。

表2 主語の格形、意味役割、有生性、特定性

	格形	意味役割	有生性	特定性
受動構文	主格	被態主	+/- ^{#3}	+/- ^{#3}
使役構文	主格	被態主	+/-	+/-

#3: 具格形補語の場合、[-animate, +specific]のみである。

表3 補語の格形、意味役割、有生性、特定性

	格形	意味役割	有生性	特定性
受動構文	与格/具格	行為主/原動主 ^{#4}	+/- ^{#5}	+/- ^{#5}
使役構文	与格/具格	行為主/原動主	+/-	+/-

#4: 具格形の場合、行為主のみを担う。

#5: 具格形の場合、[+animate, +specific]のみである。

表 4 行為連鎖

	行為連鎖	
受動構文	[主語：被態主]	← [補語：行為主/原動主]
	直接的影響	
使役構文	[主語：被態主]	← [補語：行為主/被態主]
	直接的影響	

表 1~4 を見ると、プロトタイプ受動構文と<受身>型使役構文との間に、驚くほどの共通点のあることが確認できる。この形態 - 統語的および意味 - 機能的特徴の重なりが、使役構文が受動構文の代わりに用いられる大きな要因となっていると考えられるのである。

B. プロトタイプ受動構文と補語および直接目的語を含む<受身>型使役構文との比較

表 5 構文と語幹動詞

	構文タイプ	語幹動詞の自 / 他	語幹動詞意味タイプ	対応他動詞構文
受動構文	自動詞: S+C+V	他動詞	行為/活動	あり
使役構文	他動詞: S+C+DO+V	他動詞	行為	なし

表 6 主語の格形、意味役割、有生性、特定性

	格形	意味役割	有生性	特定性
受動構文	主格	被態主	+/-	+/-
使役構文	主格	被態主	+/-	+

表 7 補語の格形、意味役割、有生性、特定性

	格形	意味役割	有生性	特定性
受動構文	与格/具格	行為主/原動主	+/-	+/-
使役構文	与格	行為主	+/-	+

表 8 直接目的語の格形、意味役割、有生性、特定性、主語との所有関係

	格形	意味役割	有生性	特定性	主語との所有関係
受動構文	NA	NA	NA	NA	NA
使役構文	再帰所有	被態主	+/-	+	不可分離的/共感喚起的所有

表 9 行為連鎖

	行為連鎖	
受動構文	[主語：被態主]	[補語：行為主/原動主]
	← 直接的影響	
使役構文	[主語：被態主]	[補語：行為主] → [目的語：被態主]
	← 間接的影響	

表 5～9 から、プロトタイプ受動構文と＜受身＞型使役構文の間には有意な相違点のあることが見て取れる。表 5 で構文タイプは、受動構文が自動詞構文、使役構文が他動詞構文である。したがって、前者には対応する他動詞構文が存在するのに対し、後者には存在しない。表 6 では、受動構文の主語が行為を直接的に被る被態主であり、有生性も特定性もプラスとマイナス双方の値を持つのに比べ、使役構文の主語は行為の影響を間接的に受ける被態主であり、特定性はプラスの値のみである。表 7 では、受動構文の格形が与格形と具格形、意味役割が行為主と原動主というように、それぞれ 2 つずつ担っているのに対して、使役構文は与格形と行為主に限定されている。表 8 では、受動構文の自動性から直接目的語が要求できず、どの項も全く該当しない。一方、使役構文の直接目的語の格形、意味役割、特定性、主語との所有関係には一定の制約が存在している。表 9 の行為連鎖は、受動構文が行為主/原動主の補語から被態主の主語への逆行作用であるのに対し、使役構文では補語から直接目的語へと順行的に作用した結果が主語へと向かう、不完全ではあるが循環的な連鎖を描いている。

B タイプの＜受身＞型使役構文が受動構文と同様に＜受身＞の意味を表せるのは、行為連鎖の作用の仕方に起因するのであって、形態 - 統語的および意味 - 機能的特徴が一致するからではないのである。その点では、A タイプとは異なる。むしろ、この B タイプの使役構文は＜受益＞型使役構文と行為連鎖に関して酷似している (3-12 参照)。

受動構文は自動詞構文なので、補語から主語への直接的なく受身＞しか表示できない。他動詞構文で間接的なく受身＞を表すには、＜受身＞型使役構文が必要になる。その意味で、プロトタイプ受動構文と＜受身＞型使役構文は、相補的關係(complementary relationship)にあると言えよう。受動構文は自動詞構文の特性から完全自動詞化、もしくは自発の自動詞構文を派生させていったが、使役構文は＜受益＞型から主語の原動主の役割を解除することで、＜受身＞型を生み出したのである。

表 1～9 はまだ暫定的な成果であって、今後関連するデータを豊かにすることで、より正確に精緻化されていかなければならない。また、使役化が本来他動詞化であるにもかかわらず、なぜ主語＋補語＋動詞の文型 A の使役構文が受動構文に置き換わる程度に自動詞化していったのか、その理由も考察する必要がある。

謝辞

* 本稿を完成させるのに際し、貴重なコメントを寄せてくださった2名の査読者並びに公刊まで励ましを与えてくださった『北海道言語文化研究』誌編集委員に心からお礼を申し上げます。

出典

文データの出典は、< >で示す。省略記号の対応は、次の通りである。

AD: Attested Data, AE: Ardjn Erx [Newspaper], K & Ts: Kullmann and Tserenpil (1996), L: Luvsanzhav (1976), MYA: Arai, et al.(1990), ÖS: Ödriyn Sonin [Newspaper], S & B: Sanders and Bat-Ireedüi(1999).

注

[1] 形態 - 統語的側面から言及する場合に「受動」を、意味 - 機能的側面から見る場合に「受身」という表現を用いる。ただし、引用文ではオリジナルの表現を尊重する。

[2] 例文の主語と動詞のテンス/アスペクトは、著者が補った。

[3] グロスの略記号の対応は、次の通りである：

ABL: Ablative, ACC: Accusative, ASS: Associative, ASR: Assertive, C: Complement, CAUS: Causative, CNCES: Concessive, CMT: Comitative, COMPL: Completive, COR: Corroborative, DAT: Dative, DO: Direct Object, EP: Epenthetic Consonant/Vowel, GEN: Genitive, HBT: Habitual, ICC: Imperfective Converbal, IMP2: Imperative, INS: Instrumental, LOC: Locative, n: hidden “n”, NEG: Negative, NOM: Nominative, NPS: Nonpast, OPT: Optative, PAS: Passive, PCC: Perfective Converbal, PF: Perfective, PL: Plural, POS: Possessive, PPST: Perfective Past, PRO: Covert Unspecific Pronoun, PRS: Present, PRTCL: Particle, PST: Past, Q: Question Marker, QUT: Quotative, REF: Reflexive-Possessive, RPST: Recent Past, S: Subject, TM: Temporal Converbal, TOP: Topic Marker, V: Verb, VLNT: Voluntative, 1SG: First Person Singular, 1PL: First Person Plural, 2SG: Second Person Singular, 3SG: Third Person Singular, 1SGPCL: First Person Singular Possessive Particle, 3PCL: Third Person Singular Possessive Particle, Ø: Zero Case, +: Attributive Use.

[4] ここでの「受動構文」とは<受身>型使役構文のことである。

[5] 査読者より、(1-2)の「流用」条件を<受身>型使役構文の必要十分条件というよりは必要条件と捉えることができるのではないかと指摘があった。確かにその場合、この「流用」条件が他の構文に当てはまることを排除するものではないと考えられる。本稿では「この2つの条件を満たす場合に限り、使役形から受動形への「流用」が生じる」とあるように、あくまで必要十分条件としての立場をとっている。

[6] “*”は、文が不適格であることを示す。

[7] 各文の語幹動詞に付加したアスペクト接尾辞-san-は、著者が補った。

[8] 山越(2012: 257)も「行為者が道具格であられることはまれ」で、「もっぱら与格形であられる」と述べている。

[9] 本稿の翻字に合わせるため、若干の修正を施している。

[10] 主語 “bi”は、筆者が補った。

[11] 自動詞語幹に受動形接尾辞の付加する事例が若干数存在するが、(ia)と(ib)、(iia)と(iib)に見るように、語幹動詞と受動形動詞との間には意味の異同があり、後者を「語彙化された動詞(lexicalized verbs)」とし

て扱うのが妥当と考えられる。

(i) a. xocor- 「決められた時間に遅れる」

b. xocr-o-gd- 「時代から取り残される」

(ii) a. dut- 「ある定まった基準や目標に届かない；何かと比較して劣っている」

b. dut-a-gd- 「必要なものや欲しいものがない」

なお、詳細な説明については、梅谷(2005)、塩谷・プレブジャブ(2006)を参照のこと。

[12]他動詞構文の直接目的語は、実際には、特定性(specificity)や所有性(possessiveness)により、対格形の他にゼロ格形や再帰所有形としても具現する。

a. 特定の：対格形 e.g. ene nom-ijg 「この本」

b. 不特定の：ゼロ格形 e.g. nom 「本」

c. 所有の：再帰所有形 e.g. nom-oo 「[主語に属する]本」

[13]自発タイプや状態タイプの語幹に使役形接尾辞+受動形接尾辞の順で二重に接辞化する例が観察される。

(i) Tüünij bij sajžr-uul-a-gd-a-v.

3SG body:NOM get better-CAUS-EP-PAS-EP-PST

(彼の身体はよくなった。) <AD>

(ii) Manaj erin-d xamgijn anxnij muzej 756 on-d Japon-ij

1PL:GEN era-LOC the most first museum:NOM year-LOC Japan-GEN

Nara xot-o-d baj-g-uul-a-gd-žee.

[place name] city-EP-LOC be-EP-CAUS-EP-PAS-PPST

(私たちの時代で一番初めの博物館は756年に日本の奈良に建てられた。) <AD>

(i)は自発タイプの自動詞語幹 sajžr- 「よくなる」に、(ii)は状態タイプの自動詞語幹 baj- 「ある；いる」に、使役形接尾辞と受動形接尾辞が付加している。橋本(2019)は自発タイプや状態タイプの自動詞語幹に使役形接尾辞が付くと行為タイプの他動詞が派生する事実を指摘した。本来、受動化をし難い自発タイプもしくは状態タイプの語幹を使役形接尾辞により行為タイプの他動詞語幹に変換することで、受動化の条件を整えるわけである。なお、受動形接尾辞+使役形接尾辞の二重接辞化の詳細については、梅谷(2006)を参照のこと。

[14]Washio(1995: 128)は「直接目的語が[-animate]の無生物の場合、受動構文の主語になれない」と述べているが、反例が散見される。

[15]グロスに合わせて語の区切りは本稿の仕方に準拠して修正した。Kuz'menkov(1986: 53)は、これらの文を挙げた後で、「具格形はまれにしか現れない」とコメントしているが、その理由については言及していない。

[16]他にも関連したデータはあるが、紙幅の都合で提示はこの2例にとどめる。なお、具格形補語をとる例で(2-12)に見る以外の意味特徴を持つものは、現時点で存在しない。これ以外の意味特徴を示すデータが見つかった場合には、もちろん、修正する必要がある。

[17]オリジナルでは、主語が文末に置かれているが、動詞の前に移して普通の平叙文の形に変えた。

[18]不特定の非頭在的代名詞 PRO は、xen negen 「誰か」で具現化した。(2-31b)も同じ。また、文の構造上、

後続の動詞を削除した。

[19](3-1a)の使役形動詞を受動形動詞に置き換えた(i)の文はまれであることが指摘されている(橋本 2003: 27の注5を参照のこと)。

(i) **Manaj xon' čono-n-d id-e-gd-sen.**
 1PL:GEN sheep:NOM wolf-n-DAT eat-EP-PAS-PF
 (私たちの羊は狼に食べられた。)

[20]与格形接尾辞には、-d と -t の 2 つの異形態がある。語末が -g/-r/-s で終わる語幹には -t、それ以外の語幹には -d が、各々、付加される。

[21]「-GD-」は、受動形接尾辞 -gd- の代表形であろう。語幹母音に応じて、後続の挿入母音は -a- ~ -e- ~ -o- ~ -ö- の 4 つの交替形を持つ。「-UUL-」は使役形接尾辞 -uul- ~ -üül- の代表形と考えられる。

[22]()の語は筆者による。

[23]但し、(3-17)のような直接目的語の現れない<受益>の形は数が少ない。それは、使役形動詞が全体で他動詞を形成することと関連しているのかもしれない。

[24]üjlčl-は、「~を世話する(to take care of)」の意味だと対格形を、「~にサービスする(to serve)」の意味だと与格形を、各々、目的語補語に指定する。

(i) **övčtön-ijg üjlčl-e-x**
 patient-ACC take care of-EP-NPS
 (患者を看病する)

(ii) **ex oron-d-oo üjlčl-e-x**
 motherland-DAT-REF serve-EP-NPS
 (自分の祖国に奉仕する)

(3-22b)は(ii)の意味で用いられている。

[25]同様の考え方については、アリオナ(2008)を参照のこと。

参考文献

- Arai, Shin-ichi, et al. (eds.) (1990) *Mongol-Yapon Yarjaanij Devter*. Ulaanbaatar: Ulsijn Xelvelijn Gazar.
- Austin, William M., Hangin, John G. and Peter M. Onon. (1997) *Mongol Reader* [reprinted]. Richmond: Curzon Press Ltd.
- アリオナ、ブヤン. (2008) 「日本語とモンゴル語の受身文の対照比較研究」、『国際協力研究誌』(広島大学大学院国際協力研究科) 第14巻第2号、37-49.
- Baatarsukh, Khatantuul. (2009) *Mongolian Grammar: Textbook*. USA: Munkhbayar Batmunkh.
- 橋本邦彦. (2003) 「モンゴル語の受動文の意味と機能」 『日本モンゴル学会紀要』、第33号、15-27.
- _____. (2019) 「モンゴル語の使役文の意味の違いについて」、『北海道言語文化研究』、第17号、141-188.
- Janhunen, Juha A. (2012) *Mongolian*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- 金岡秀朗. (2009) 『実用リアル・モンゴル語 - わかりやすい文法ナビ』 明石書店.
- 鯉渕信一・ダンバダルジャーナランツェツェグ. (2012) 『モンゴル語慣用句用例集』 大学書林.

- Kullmann, Rita, and D. Tsrenpil. (1996) *Mongolian Grammar*. Hong Kong: Jenco Ltd.
- Kuz'menkov, Ye. A. (1986) "Passiv v mongol'skom yaziyke," Kononov, A. H. et al. (eds.), *Mongolica*, Moscow: Nauka, 52-61.
- Lvsanzhav, Čoj. (1976) *Mongol Xel Bičig*. Ulaanbaatar: BNMAU Sajd Narijn Zövlölijn Ulsijn Deed, Tusgaj Dund, Texnik Mergežlijn Bplovstrolijn Xoroonij Xevlel.
- 中嶋善輝. (2015) 『明解モンゴル語文法』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 西村義樹. (1988) 「行為者と使役構文」 『構文と事象構造』 中右実・西村義樹 (編)、107-203、研究社.
- 小澤重夫. (2005) 『元朝秘史蒙古語文法講義 終講上』 風間書房.
- Sanders, Alan K. and Jantsangiin Bat-Ireedüi. (1999) *Colloquial Mongolian: The Complete Course for Beginners*. London/New York: Routledge.
- Shibatani, Masayoshi. (1985) "Passives and Related Constructions: A Prototype Analysis," *Language* 61, 821-848.
- 塩谷茂樹・E.プレブジャブ. (2006) 『モンゴル語ことわざ用法辞典』 大学書林.
- Skorodumova, L. G. (2002) *Učebnik Mongoliskogo Yazijka*. Moskva: Muravej.
- 東京外国語大学. 『モンゴル語文法モジュール』 (www.coelang.tufs.ac.jp/mt/mn/ 2019.3.29.閲覧)
- 梅谷博之. (2005) 「モンゴル語の自動詞の受身」 麗澤大学言語研究センター第20回研究セミナー (2005年11月17日)、1-19.
- _____. (2006) 「モンゴル語における受身接尾辞と使役接尾辞の連続」 加藤重弘・吉田浩美 (編)、『言語研究の射程-湯川恭敏先生記念論集-』、83-102、ひつじ書房.
- _____. (2008) 「モンゴル語の使役接辞-UUL と受身接辞-GD の意味と構文」 東京大学文学部・大学院人文社会系研究科. (2017.2.27.閲覧)
- Washio, Ryuichi. (1995) *Interpreting Voice*. Tokyo: Kaitakusha.
- 山越康裕. (2012) 『詳しくわかるモンゴル語文法』 白水社.

執筆者紹介

氏名：橋本 邦彦

所属：室蘭工業大学大学院工学研究科ひと文化系領域

Email：92hashimot@gmail.com